

人間、働いてさえいれば、
なんとかなります

ゲスト●漫画家
西原理恵子氏



©西原理恵子

プロフィール●さいばら・りえこ

1964年(昭和39年)高知県生まれ。武蔵野美術大学卒。大学在学中に漫画家デビュー。以後、『ぼくんち』『まあじゃん ほうろうき』『パーマメント野ばら』など、独自の作風で熱狂的なファンを獲得。96年、戦場ジャーナリストの鴨志田稔氏と結婚。その後、夫のアルコール依存症、離婚を経て家族がまた一つになるまでの姿は『毎日かあさん』として映画化もされている(2011年2月)。8月27日に毎日新聞連載の『毎日かあさん』単行本第8巻(いかりが反抗期編)が発売。



旅先では、その土地で食べられているものを食べるのが流儀。

お金があれば、家族を守れる。人として生きることが出来る

——漫画家として大きな成功をおさめています
が、生い立ちをつづった著書では、その原動力は
少女時代の貧しさへの反発だと書かれていますね。

私が過ごした高知の田舎町は、周りがみんな貧
乏で、あるのは典型的な閉塞感だけでした。女性
は16で結婚して、17で子どもを産んで、18で捨て
られて、それでまた19で新しい男と結婚してまた
捨てられる。その繰り返し。頑張ってる人もいた
けど、途中で頑張るのをやめちゃうんです。周り

に良いモデルになる大人がいないわけですから。
貧困が招く世代間の負の連鎖がずっと続いている
環境でした。

貧乏と暴力つてすごい仲良しで、それは弱い人
に最初に向かいます。母親はいつもお金がなくて
いらいらして子どもを怒鳴りちらす。父親は母親
を殴り、子どもたちは親に本気で殴られる。周り
は全部そうでした。それを見て、私も将来夫に殴
られて、子どもを怒鳴りつける女になるんだって
思うと、怖くて仕方がなかった。

——子どものころの将来の夢は？

絵で食べていきたいっていう漠然とした想いは
ありましたけど、女の子が女優さんになりたいい
て言うのと同じで、絶対になわなないし、口に出
してもいけないんだらうなって思っていました。そ
もそも絵で褒められたこともなかったし、勉強も
ダメだったし、自分は一生夢のかわらない人間だ
と信じてましたから。周りの大人も誰も夢や希望
を語らないし。

大学受験の当日、ギャンブル中毒だった父が自
殺したんです。父は会社を経営してたんですが、
実際は借金まみれで、亡くなった後、家にはたく
さん借金取りが押しかけてきました。私はもう進
学なんてあきらめてたのに、母が借金返済のあと
に残った140万円のうち100万円を私に渡し
て、ここから出なさい、あんたは東京に行きなさい
と。それから、東京の美術予備校に通って美
大へ入学。絶対にあの貧しさに、あの場所には戻
らないぞと心に誓って、必死にやってきました。

——西原さんは女性の仕事を持って働くことの大切
さを訴えていますね。

母はお金のことでも父と毎日夫婦げんかです。で
も、そうやって怒りながらも彼女はずっと働いて
きたんですね。そのお金で私たちはなんとかま
とに生きられた。もし、母が働いてなかったら本
当にひどいことになってたと思います。

貧乏を知らないって、いいことです。でも、
実は貧困つてすぐ隣にあるんです。だから女性は
働くべきです。専業主婦になって、夫を支えて、
子どもにおいしいごはんを食べさせるって、すご
く大事。でも、それだけではあまりに恐ろしい。
夫の会社はつぶれない、夫は自分を裏切らない、
夫は病気になる。彼女たちはそう信じてます
けど、間違いないんです。いざそうなったとき、家
はあつという間に壊れるし、貧困に陥ります。で
も、男性もそういう家庭的な女を求めますよね？
その考え方を変えていかないと。

女性が自立して経済力を持てば、夫を助けられ



るし、暴力をふるう夫から逃げられる。女の人は、誰だって自分の子どもを泥棒や売春婦にしたくない。子どもをちゃんとした「人」にするために、必死に働きますよ。アジアの貧しい国を旅すると、一生懸命働いているのはやっぱり女性。男の人は昼間っから飲んでくれていますから。ただ、女性がちゃんとした仕事に就けないから、稼げないんです。そもそも男の人にお金を預けて、この数千年貧困がなくなったためしがない。女性がちゃんと職業を持つ世の中に変えていけば、貧困はなくなると私は信じてます。

—— お金のことを日本人はあまりはつきり言いませんね。どこか「ほしたくない」という思いがある。

でもね、やっぱりお金がないといろんなものを守れない。私の夫（戦場ジャーナリスト・作家 鴨志田穰さん）は、アルコール依存症になって入院して、結局、最後は癌になって死にましたが、つくづく思うのは、人を人として看取るにはものすごくお金がかかることです。

当時、彼は病気のせいで酒を飲んでほめちゃくちゃ暴れました。もし私にお金がなかったら、憎しみが残らなかつたでしょうね。彼を人に戻すことができたのは、やっぱりお金があつたからなんです。もし、お金がなかったら彼を見殺しにして、子どもたちにお前の父親は最低の人間だったと言いつけたと思います。それは憎しみの連鎖ですよ。私は働くことができたから、そうせずに済んだ。働けば、人は人として生きることができる。だから働くって素晴らしいことですよ、やっぱり。



つらくても、愚痴らず笑う黒潮文化

—— 鴨志田さんとは一度離婚し、その後、西原さんの献身的な支えもあってアルコール依存症を克服し、また家族が一緒に暮らしています。鴨志田さんを、なぜもう一度受け入れられたんでしょうか。

これは西の情の文化に通じるかもしれませんが、「まあ、ええやん。帰ってくるならお帰りって言

うわ」っていうね、そんなニュアンス。どちらかというと、東は筋を通す文化だから、曲がったことは許せない感じでしょう？ でも縁あって子どももできたわけだし、「だから嫌い嫌い言うのはやめて、まあ、お帰りって言おか」って、そういう感じなんです。

それと西は、どれだけ面白いことができるかが上位にきますね。私は職業柄ふだんめつたに笑わ

毎日新聞社刊「毎日かあさん」第二巻 お入学編P75 © 西原理恵子



ないんですけど、彼は突拍子もないことやつて私を笑わせるのがうまかった。海外で夫婦げんかの後、素っ裸でヤシの木から「かあさん、ごめん」と叫びながら海にダイブしたり。まあ、これは見事に息子に受け継がれてますけど。

——毎日新聞連載の『毎日かあさん』を読むと、息子さんの突拍子のなさはよくわかります。

夫が死んだとき、お葬式に高須クリニックの高須克弥先生がきてくれて、息子を指さして私にこう言ったんです。「人はね、遺伝子の乗り物、舟なんです。ほら、あの新しい舟に乗り込んだ誇らしげな鴨志田さんをごらん下さい。もう古い舟のことは考えなくていいんですよ」って。そのとき

は意味がよくわかりませんでしたけど、今見ると、ああ乗ってるな—って思いますね（笑）。そっくりなんですよ、やることです。

——西原さんの手にかかる時、ありふれた日常が面白い漫画になる。ネタを見つけてふくらませるのがすごくお上手です。

それは故郷の高知からもらったものかもしれない。高知人って、酒と料理と面白い話で人をもてなすんです。つらいことがあっても人前で愚痴はだめ。必ず何か面白くアレンジして言う。それが高知の大人の流儀。これって黒潮の民、鯨追いの文化なんです。人を楽しませるのが大好きで、東南アジアとか沖縄とかと、すごく似てると感じます。あとは「文句言い」ですね。東の人は弱いところはつつこまないでしょう？ 西って、つつこんでいじってナンボ。オチのない会話って、会話じゃないんです。だから自分はクリエイターじゃなくて、アレンジャーだと思ってますね。

——長年多くの作品を描いてきて、スランプに陥ることはないんですか？

万年スランプですよ（笑）。私はマイナス思考で、ダメだダメだっていつも思ってる。でも、高須先生に言わせると、そうやって考えるからこそ私の作品はできるわけで、それはしょうがないって。たしかにね、漫画家って考えることをやめない商売だからしんどい。だから余計、旅行に行きたくなるんですよ。

旅行は私が子どもと行きたいだけで、子どももた

ちは家でごろごろしてたいから、かなり迷惑がってます。今年の夏は息子を海外にホームステイさせたんですけど、すごく嫌がってました。でも男はやっぱ外の釜のメシを食わないとねえ。

——漫画家として、これからの目標は？

ずっと描いていきたいですね。働き続けたい。一番怖いのは働けなくなること。だから優先するのは健康、仕事、家族。

こういう作品を描きたいっていうのはないです。皆さんにほんのちよつと喜んでもらえるものを目指したい。仕事で腹が立って眠れない人が、私の漫画を読んで気持ち楽になって眠れましたなんて手紙をもらうと、ほんとううれしい。人の役に立ってあげたいですよ。お金はありがたいの証拠。コロツケ屋のおばちゃんみたいに、おいしかったよって50円もらう。そんな感じが理想ですね。

——最後に働く女性たちにメッセージをいただけますか。

子育てしながら働く女性の先輩で、自分の時間がない、夫が協力的じゃないって愚痴を言う人がいるでしょう？ あれって仕事ができない女なんです。赤提灯で会社の文句言ってるおじさんと同じ。そんな人と一緒にいたらダメです。そこからどうするか、なんです。ただ文句言ってるだけの人なら会社もいらぬ。仕事も子育ても、大変ですけどすごく面白いし、忙しいうら夢中になれば文句言ってる暇なんてない。とにかく、人間、働いてさえいれば、なんとかなるんです。